

6月に向けて

代表取締役 三田雅憲

暑さが厳しくなってきました。熱中症の対策を会社としても講じていきたいと考えておりますが、各社員においても予防や自己対策(栄養や睡眠・その他)をして暑さに負けない身体づくりをよろしくお願いします。本日はネットニュースより「株価が6万円台の熱狂と、実体経済との断絶とは」という記事を紹介していき、当社での現在をお伝えいたします。

『「景気指標の急落と株高の鮮明な乖離」帝国データバンクがまとめた、2026年4月の国内景気動向調査(5月8日発表)によると、景気DIは41.5となった。前月から1.4ポイント下がり2カ月続けて悪化している。この結果は全国1万538社から寄せられた、現場の生々しい判断を映し出したものだ。ここで語られる「景気DI」とは、企業が肌で感じる商売の勢いを数値にした指標である。それぞれの企業が自社の現状を5段階で判断し、その声をひとつにまとめることで景気の体感温度を測る。この指標の分かれ目となるのは「50」という数字だ。「50」を上回れば景気が良いと感じる実感が強く、下回れば悪いという実感が広がっていることを意味する。41.5という今回の数字は、景気が足踏みしているといったレベルを通り越し、現場の多くがはっきりと冷え込みを感じている事実を物語っている。足元の2026年5月12日の東京株式市場に目を向けると景色は一変する。日経平均株価の午前の経値は、前日より387円56銭高い6万2,805円44銭を記録した。AIや半導体関連の企業が好調な決算を見せたことで買いが集まり、一時は上げ幅が800円を超える場面もあった。中東情勢への不安や高値への警戒感から値を下げる瞬間もあり、勢いはどこか危うい。それでも株価が示す将来への期待感と、資源が手に入らずに苦しむ製造現場の苦境はあまりにも対照的だ。同じ日本経済を眺めているながら一方は期待に資本が注がれ、もう一方は物理的な限界によって立ち往生している。この相容れない状況が、今の経済の姿にほかならない。景気DIが悪化した背景にはいくつもの要因が複雑に絡んでいる。中東情勢の緊迫化で原油やLPGが高騰し、それが燃料費や材料費を押し上げた。仕入れ価格の上昇分を販売価格に乘せられない企業は、収益を大きく削られている。特にホルムズ海峡が閉鎖に近い状態にある、日本のものづくり企業の現場を直撃した。足元の計測感が沈む中で株価が高止まりするいびつな光景は、我々が一度立ち止まって考えなければならない。また、国内のものづくりが地政学的なトラブルによる供給の中断に対し、あまりにも脆いという事象だ。物を作る現場は届かない材料と進まない価格転嫁という現実と直面している。この材料不足の波は、様々な製品に及んでおり「カルビーのポテトチップス」の袋をインクの供給不安から白黒の印刷に変えたニュースは象徴的だが、車業界の深刻さはその比ではない。自動車部品製造大手「デンソー」は、材料供給の不安によって2027年3月期の営業利益が450億円も押し下げられると見通している。混乱は板金塗装を手掛ける「街の車屋」にも影を落とす。仕事に欠かせないシンナーの供給が8割減り、仕入れ価格は5割以上跳ね上がった。物が無いという現実が経済をじわじわと蝕んでいる。』と結んでいます。

当社においては、シンナーや塗料も少し時間や数量調整の影響を受けていますが、材料がなくて仕事が進まないという事にはなっていません。また、日頃仕入先さんとも丁寧な対応を社員がしてくれており、そのような小さい積み重ねが供給を途切れさせない流れとなっている気がします。このシンナーや塗料が不安定な状況は、まだしばらく続くような感じです。当社としては工場の4S活動や「やり直しゼロ」を徹底し、時間厳守と仕事に対する集中力を徹底することで乗り切っていきたいと考えております。社員諸君のご協力をよろしくお願いします。